

日露交流を生かした下田・富士・沼津の地域活性化 -ヘダ号建造の史実を学ぶスタディツアー構築と世界記憶遺産への道-

日本大学 国際関係学部 安元隆子ゼミナール

指導教授：安元隆子

参加学生：塩田綾乃、清水真那斗、和田桃子、山岡優斗
新金美嶺、常盤成美、西堀将之、森本遥菜
仲野和歩、小柳津諒、古屋真衣、上村彩菜

1. 要約

幕末、日露和親条約締結のために下田に来航したロシアのプチャーチン提督一行は、安政の大地震の津波と駿河湾の荒天によりディアナ号が沈没、戸田で伊豆の船大工らと協力して代替船・ヘダ号を建造し、帰国する。鎖国の時代に繰り広げられたこの人的・技術的国際交流は語り継がれるべきものである。しかし、地元静岡県民でもこの史実を知らない人がいる。本研究ではこの史実を広く世に知らせるために、スタディツアーに活用できるパンフレットを作成し、また、世界の稀少文献保護のための「世界記憶遺産」登録を目指して日本とロシアのディアナ号とヘダ号に関する記録の目録を作成した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、下田、富士、戸田で繰り広げられたディアナ号とヘダ号を巡る日露交流の原点というべき史実をより広め、グローバル時代の静岡県民の国際意識の更なる向上と、日露交流の活性化に寄与することである。具体的には以下の2点である。

- ①ゆかりの地を巡るスタディツアーのパンフレットを制作する。
- ②この史実に関する日本とロシアの記録文献目録を作り、稀少な文献を保護するための「世界の記憶」に登録することを目指す。

3. 研究の内容

本研究の内容は以下の4点にまとめることができる。

- ①日露和親条約締結に伴うプチャーチン提督一行のディアナ号とヘダ号建造にまつわる歴史を日本財団の「ディアナ号の軌跡」を元に学ぶ。
- ②下田、富士、戸田、韮山の日露交流ゆかりの地を各々の地の郷土研究家、博物館関係者、学芸員、市役所の方々と巡り、史実を検証する。
- ③ ①と②を元に、スタディツアーに活用できるようなパンフレットを作成する。
- ④ ①と②を元に、世界の稀少な文献保護を目的とした「世界の記憶」への登録申請準備の一環として、日本とロシアの記録目録を作成する。

4. 研究の成果

(1) 当初の計画

- ・研究内容②の史実の検証は、下田・戸田・富士への2泊3日のゼミ研修を行い、日露交流の地の隅々まで歩いて学生目線の新しい発見も③のパンフレットに掲載する予定であった。
- ・沼津の歴史資料館や東京の東洋文庫の資料なども実際に肉眼で確かめる予定であった。
- ・毎年安元ゼミが行っているロシア・サントペテルブルグ研修の際に、ロシア国立海軍文書館とロシア中央海軍博物館にて、資料の確認を行う予定であった。

(2) 実際の内容

 一部修正

- ・未曾有の新型コロナウイルス蔓延のために、大学より宿泊を伴う研修は禁じられ、また、日帰り研修も制限が厳しく、当初計画していたようなフィールドワークができなかった。下田と韮山、戸田と富士の二日間に分けて行い、そのために滞在時間が予定より少なく、ゆかりの地の隠れた魅力までは探し出すことができなかった。また、当初計画していたフィールドワークの当日が台風直撃のために予定を変更せざるをえず、4週間ほど実施が遅れたため、その後のパンフレット作成の時間が短くなり、編集作業が強行スケジュールとなった。
- ・沼津歴史資料館と東京の東洋文庫も残念ながら訪問できず、ネットでの確認となった。
- ・同様に、コロナ禍により大学の海外ゼミ研修も今年度は実施を見送られたため、ロシアの記録についてはサントペテルブルグで文献や絵画の記録を実際に確認することはできず、ロシア連邦公文書局・ロシア国立海軍文書館・東京大学史料編纂所の「ロシア国立海軍文書館所蔵日本関係史料解説目録」を元に作成せざるをえなかった。

(3) 実績・成果と課題

<実績>

- ・上記のような内容の修正はあったものの、ゼミでの文献学習後のフィールドワークによって、より詳しく具体的な情報を得ることができたと共に、史実を体感することができた。また、下田・富士・戸田の歴史研究者や博物館の学芸員、そして、行政に携わる方々のお話を伺ったことも非常に有益であった。

・フィールドワーク日程

- ① 11月8日(日) 8時~18時 参加者・安元ゼミ3年9名 引率・安元隆子
交通手段：座席数24の借り上げ小型バス
活動内容：三島駅発 8時—下田 9時30分~13時30分 日露協会下田支部長・杉坂太郎氏、及び下田市役所総合政策課の藤井茂雄氏との懇談及び下田実地踏査 [下田開国博物館・下田湾・長楽寺(日露和親条約締結地)・玉泉寺のロシア人墓地ほか] —韮山 15時30分~17時 韮山反射炉・江川邸・江川文庫館長の講話 —三島 18時
- ② 11月14日(土) 8時~18時 参加者 安元ゼミ3年12名 引率・安元隆子
交通手段 座席数24の借り上げ小型バス

活動内容：戸田 9時～12時30分 戸田実地踏査〔戸田造船郷土資料博物館（筒井学芸員との懇談）・洋式帆船建造地碑・宝泉寺（プチャーチン提督滞在中・ロシア人水兵の墓）・本善寺（士官滞在中）・勝呂邸（幕府側詰所）・大行寺（条約交渉）出逢岬（戸田遠望）一富士 14時～17時 富士市立博物館元館長・加藤昭夫氏との懇談〔三四軒屋公園（ディアナ号の錨）・広見公園（友好の像）・ふじのくに田子の浦みなと公園（歴史学習施設ディアナ号）〕— 三島着 18時



下田・玉泉寺にて、日露協会下田支部の杉崎氏の講義を聴く



戸田造船郷土資料博物館にて、筒井学芸員の講義を聴く



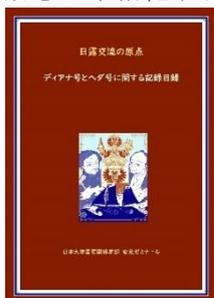
歴史学習船ディアナ号にて、富士市立博物館元館長の加藤氏の講義を聴く

<成果>

・これまで各地域で取りあげられてはきたが、ディアナ号とヘダ号を巡る日露交流の史実ゆかりの地をまとめたパンフレットはなかった。これらをまとめ、スタディツアーに活用されることを目的としたパンフレット「日本とロシアの絆 ～下田・富士・戸田の旅～」をA5判、フルカラーの20ページにまとめた。旅行社の単なる観光パンフレットとは異なり、あくまでも史実を知ってもらうことに主眼をおき、研究成果を活かしたものである。また、すべて学生が編集をした。印刷は1500冊。下田の博物館、観光案内所、道の駅、関係寺院、学校、市役所等に350冊、同、戸田に350冊、沼津市に100冊、富士に300冊、ゼミ生及び本学に150冊、三島市に100冊、その他ユーラシア研究者や組織等に150冊配布する。



「世界の記憶」登録のための準備としての「ディアナ号とヘダ号に関する記録目録」も、これまでこの史実を巡るこのような日本とロシアを視野に入れた目録はなく、貴重な試みと自負している。A4版74ページで、文献タイトルだけでなく、その文献がどのような内容のものであるかを備考の欄に学生たちが書き入れた。まだまだ不十分なものであるが、これが基礎となって、幕末の技術的・人的日露交流の記録として「世界の記憶」への登録を目指す動きが本格化すれば幸いである。



No.	文献タイトル	著者	発行年	備考
1	ロシアの汽船「ディアナ」の建造
2	ロシアの汽船「ヘダ」の建造
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74

No.	文献タイトル	著者	発行年	備考
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

(4) 今後の改善点や対策

もともと実質6か月の短い研究、作業期間ではあるが、今回のようにコロナ禍と台風によるフィールドワーク延期なども考え併せ、できるだけ早めの完成予定を設定する必要がある。また、印刷代を安価にするためネット注文にしたが、思うような色が出なかったことが残念である。資金を確保してしっかりと色校正をした方が良い。そして、印刷物にはどうしても見落としがあるため、最低、3名の目を通して校正をすべきである。

5. 地域への提言

本コンソーシアムの事業募集もそうだが各市町村の縦割りの発想をしがちである。しかし、本研究のように県内の市町村を横断する発想のものもある。そうした発想に基づく研究にも注目すべきである。また、ぜひ本研究で作成したパンフレットを中学や高校のスタディツアーに活用してほしい。そして、日本とロシアが協力してディアナ号とヘダ号建造を巡る史実を「世界の記憶」に登録する活動を始めるべきだと考える。この史実はそれにふさわしい価値があり、登録が実現すればそれは日本とロシアの財産となり、隣国・ロシアとの交流を深め、今後の日露関係にも良い影響を及ぼすに違いないからである。

6. 地域からの評価

コロナ禍、大学から行動規制がかかる中、強行日程で日帰り研修を行い、オンラインを中心にまとめざるをえなかった精一杯の研究成果報告であるが、成果物を受け取った戸田造船郷土資料博物館の筒井久美子学芸員や富士市立博物館元館長の加藤昭夫氏、日露協会下田支部長・杉坂太郎氏、下田開国博物館館長・尾形征己氏、下田市役所総合政策課・藤井茂雄氏は学生の努力を大いに認めてくださり、日本とロシア、そして下田・富士・戸田を横断する本企画を評価し、積極的に二つの成果物を活用したいとのお言葉をいただいている。